66 『煙蘿子針灸法』について

上田善信

『煙蘿子針灸法』不分巻一冊は、低迷していた鍼灸が再興する以前の室町後期・享禄三年（一五三〇）に成立した鍼灸書である。著者の樵青斎洞丹についての詳細は不明であるが、本書の自序に「予臥病数月、偶渉猟医方、以求衛生之捷径也。於此撰岐黄色以来針灸之法、集成小冊」と病気になったことを契機として撰じたこと、そして「常薬石不入市、縦是得薬材、亦難辨其真偽、豈如針灸之法」と鍼灸の利便性を述べている。

本書の構成は、刺鍼上の注意、人神所在、鍼灸宜忌、鍼灸法、十二経の次第などについて論じ、諸病鍼灸の法として中風門から小児門までの二七病門に対する鍼灸治療について述べる。そして全てにではないが引用文献の明示があり、また書中には仰人経穴図一枚、手足要穴図七枚が見られる。この手足要穴図は『難經集注』や『黄帝八十一難經纂図句解』に見える図とかなり類似しているが確定できず、仰人経穴図についても類似の医書があるものの決め手になるものがない。

引用文献には、『素問』『難經』『聖濟總録』『鍼灸資生経』『脈訣』『玉機微義』『医書大全』『居家必要』『事林広記』『説文』『玉篇』『鐘呂伝道集』がある。特に引用回数が多いのが『素問』『玉機微義』『難經』『医書大全』『居家必要』『事林広記』である。

『素問』は経文と王冰注及び新校正注とを一体で引用しており二四条（小児門の重複を含む）みられる。その場合「素問九云」「素問五云」などのように巻数の表示があり、この巻数は元刊本と一致している。また小児門には「踹時袞切」という音釈がみられ、これも元刊本、古鈔本と一致している。このことから引用された『素問』は十二巻本の『素問』といえる。

『玉機微義』は引用が最も多く三一条みられる。そして引用の明示がない条文のほとんどが『玉機微義』からのものである。また書名として見える『千金方』『病機』『難

知』『内経』『脈訣』（虚中有熱）はすべて『玉機微義』からの引用であり、「潔古云」「子和云」という引用もまた『玉機微義』からのものである。

『難經』の引用は七〇難、七一難、七三難、七四難、七八難の五条で中に「俗解曰」とあり、また足要穴図中の陽陵泉にみられる「難經云膝下一寸」という一文も『勿聴子俗解八十一難經』からの引用である。

このほかに本書の引用の特徴として、次の点が上げられる。『居家必要』（五条引用）『事林広記』（四条引用）といった日用類書といわれるものを引用した医書が他に見られないこと（ただ『鍼灸拓日編集』に『事林広記』の引用が見られる）。そして既に当時ではその影響があったといわれている『鍼灸大全』や『神応経』の影響もみられないこと。さらには『万安方』の基盤となった『聖済總録』（二条引用）や十四世紀から十七世紀にかけて日本や朝鮮でよく用いられていた『鍼灸資生経』（一条引用）の影響もみられないことである。

以上のことから、本書は仏教医学の影響もみられず、『玉機微義』に基づいた鍼灸書で、その後の明医学に基づく鍼灸の先駆けとなる鍼灸書といえる。書名にある「煙蘿子」という冠称と本書の内容とは直接の関連はみられない。

（神奈川地方会）